



2008年4月3日

学校法人学習院長 波多野 敬雄 殿  
学習院大学長 福井 憲彦 殿

社団法人 日本建築学会  
関東支部長 片桐 正夫

### 学習院ピラミッド校舎群の保存に関する要望書

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より本会の活動につきましてはご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

この度、貴大学はピラミッド校舎群を取り壊し、跡地に地下1階地上11階建の中央教育研究棟（仮称）を新築すると、聞き及んでおります。

ご承知のように、学習院大学のピラミッド校舎群は、「学習院創立85周年・私学再建15周年記念事業」の一環として建設されたもので、当時の学習院長安部能成が「建築は現代の科学と芸術の成果を顕現する」と考え、新たに新築する校舎群の設計について学習院文学部長で美術評論家の富永惣一の紹介で前川國男に協力を求め、学校と設計者の熱意と努力により、1960年7月に完成したものです。前川國男（1905-1986）は、1928年大学卒業と同時に渡仏し、世界的建築家ル・コルビュジエのアトリエで学び、帰国後、半世紀にわたり日本の建築界を主導した建築家です。

学問の自由と社会奉仕という大学本来の機能を通して建物の中に真の大学らしさを生み出すことを目指し、中央に中庭を配した校舎群を「学問のコア」と位置づけ、中庭を校舎群（北1号館、南2号館、本部棟）のピロティと廻廊でかこみ、人々が集まる広場を構成しています。武蔵野の面影を色濃く残すキャンパスの中に、南と西に建つ戦前の建物との関係をも考慮して建てられ、新旧があいまった新しい象徴的な風景を創出させることに成功し、当時、国内外の建築界において高い評価を得ました。また晩年、前川は師のル・コルビュジエに褒められたのは学習院だけであったと述べています。

校舎群のうち本部棟はすでに改築されましたが、広場と3棟の校舎群は半世紀近く経た今なお当初の佇まいを良くとどめ、とりわけ、中庭の中心に建つ中央教室は「ピラミッド校舎」、「ピラ校」の愛称で呼ばれ、多くの卒業生と在学生に親しまれ、貴大学のシンボルとなっています。

貴下におかれましては、この建物の持つ歴史的価値とともに、計画当初に注ぎ込まれた大学関係者と設計者の先見的な意図と尽力をお汲みいただき、その保存活用について再考下さるよう、格別の配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、本会は、この建物の保存活用に関してできる限りのご協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2008年3月26日

## 学習院ピラミッド校舎群についての見解（案）

社団法人 日本建築学会関東支部  
建築歴史・意匠専門研究委員会  
主査 大橋竜太

この学習院ピラミッド校舎群は、ピラミッド校舎のほか、北1号館、南2号館、本部棟とともに、近代日本を代表する建築家・前川國男の設計、大成建設株式会社の施工により、1960年7月に竣工した。

この作品には、戦後の前川の設計手法の代名詞ともいえるべき「テクニカル・アプローチ」という技術性を慎重かつ綿密に考慮した設計手法の特徴がきわめてよく表れている。中庭の中心に設けた中央教室は、中庭が建物の谷間とならず光と広い開放感を得るため、四角錐の形となり、その形態からピラミッド校舎と呼ばれているが、この四角錐を校正する4つの三角形スラブは稜線に併行な網目状の交叉梁架構とし、各スラブは斜面となった客席のスラブで中間部分を支持され、柱のない大空間を創り出し、教壇と座席が一体となった階段教室を構成している。また、座席の下部のスラブはピロティの天井を兼ねており、デッドスペースとなりがちな建物下部の周囲を、人々が行き交う廻廊として活かしています。すなわち、構造の形式がそのまま内部空間、外部空間のデザインと重なっている。

さらに、ピラミッド校舎の外壁と屋根を兼ねたコンクリート・パネルによる外装の工法は、日本で初めてカーテンウォール工法を実施した前川ならではの技術とデザインの力量を示すもので、この技術は、その後「タイル打込みプレキャスト・コンクリート・パネルによる二重外壁工法」となって、「山梨県立美術館」（1978年）、「国立西洋美術館新館」（1979年）、「福岡市美術館」（1979年）等、晩年の作品に展開している。

このように、技術的な考慮とその造形表現を同時に追求した独自の構造形式により、大きな空間を無柱で実現し、その構造形式が内観、外観の力強い造形表現になっていることは、前川作品の大きな特徴であると同時に、当時のモダニズム建築の特徴をよく示すものとして、きわめて貴重な建物である。

また、前川はこの作品において、初めて、単体の建築ではなく複数の建築と広場から成る群としての設計に取り組み、そのデザイン手法は、その後、「埼玉会館」（1966年）、「埼玉県立博物館」（1971年）、「東京都美術館」（1975年）等に展開されている。

以上のように、技術的にも造形的にも、前川独自の建築方法論を構築するうえで、きわめて重要な作品として位置づけられると同時に、戦後日本の建築作品群のなかでも国際的な高い評価を得た優れた作品である。

なお、前川國男の略歴を以下に示す。

1905年、新潟市に生まれる。父前川貫一（1873-1955）は旧彦根藩士族の出身で、東京帝国大学土木学科を卒業後、内務省土木局の土木技師として、信濃川、利根川、木曾川などの治水工事に携わった。國男の弟春雄（1911-1989）は、東京帝国大学法学部を卒業後、日本銀行に入行、後に同行第24代総裁（1979-34）に就いている。母菊枝（旧姓田中）の弟佐藤尚武（1882-1971）は、東京商業学校卒業後、外務省に入省、戦前には国際連盟事務局長、外務大臣を歴任し、戦後は参議院議員を務めた。

1925年、東京帝国大学工学部建築学科に入学、同期に、谷口吉郎、横山不学、太田和夫らがいた。1926年、恩師岸田日出刀が欧州視察で持ち帰ったル・コルビュジエ（1887-1965）の著作を読み、強い衝撃を受けて、ル・コルビュジエに師事することを決意する。大学卒業直後の1928年4月に渡仏し、1930年4月までの2年間、日本人として最初に、パリのル・コルビュジエのアトリエで修行した。いうまでもなく、ル・コルビュジエは、20世紀に世界的なスケールで展開された近代建築（モダニズム建築）の最も重要な建築家である。

1930年4月に帰国し、同年8月から、アメリカ人建築家のアントニン・レーモンド（1888-1976）の事務所に1935年9月まで勤務している。この間、1930年10月に、最も感銘を受けたル・コルビュジエの著書『今日の装飾芸術』を訳出し刊行している。なお、レーモンドは、旧帝国ホテルの設計者フランク・ロイド・ライトの助手として1919年来日し、その後、日本で設計事務所を開設していた。

1935年10月、レーモンド事務所の同僚、田中誠、崎谷小三郎、寺島幸太郎と共に、前川國男建築事務所を設立し、以後、戦前戦後の半世紀の長きにわたり、旺盛な設計活動を行い、多くの優れた作品を設計した。「日本相互銀行本店」（1952年）をはじめ、6度に及ぶ史上最多の日本建築学会作品賞と最初の日本建築学会大賞を授与され、朝日賞、毎日芸術賞、日本芸術院賞、オーギュスト・ペレー賞なども受賞している。また、日本建築家協会会長、UIA副会長などの要職を歴任し、戦前戦後を通じて日本の近代建築を主導した。1986年逝去。

#### 主な作品

木村産業研究所（1932）森永キャンディストア銀座売店（1935）笠間邸（1938）岸記念体育会館（1940）自邸（1942）紀伊国屋書店（1947）慶応病院（1948）日本相互銀行本店（1952）青森県立弘前中央高等学校講堂（1954）神奈川県立図書館・音楽堂（1954）MIDビル（1954）NHK富士見クラブハウス（1954）国際文化会館（1955）福島県教育会館（1956）岡山県庁舎（1957）世田谷区民会館・区庁舎（1959・60）京都会館（1960）東京文化会館（1961）晴海高層アパート（1958）阿佐ヶ谷テラスハウス（1958）ブリュッセル万博日本館（1968）ニューヨーク世界博日本館（1964）日本万博自動車館、鉄鋼館（1970）岡山県総合文化センター（1962）神奈川県立青少年センター（1962）岡山美術館（1963）学習院大学図書館（1963）弘前市民会（1964）世田谷区郷土資料館（1964）紀伊国屋ビル（1964）蛇の目ミシンビル（1965）埼玉会館（1966）東京海上ビル（1974）差玉県立博物館（1971）東京都美術館（1975）弘前市立博物館（1976）ケルン市立東洋美術館（1977）熊本県立美術館（1977）福岡市美術館（1979）国立西洋美術館新館（1979）弘前市斎場（1983）新潟市美術館（1985）等